人間国宝
文楽人形遣い
吉田　和生

【芸歴】
昭和42年７月　文楽協会人形部研究生となる
昭和42年７月　吉田文雀に入門、吉田和生と名のる
昭和43年４月　大阪毎日ホールにおいて初舞台
平成29年10月　重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される

【受賞歴】
昭和56年８月　昭和55年度因協会奨励賞
昭和62年７月　昭和61年度因協会奨励賞
平成３年 １月　平成２年度文楽協会賞
平成４年 １月　第11回(平成３年)国立劇場文楽賞文楽奨励賞
平成12年７月　平成11年度因協会賞
平成16年１月　平成15年度大阪文化祭賞
平成18年３月　第25回(平成17年度)国立劇場文楽賞文楽優秀賞
平成26年３月　第64回(平成25年度)芸術選奨文部科学大臣賞
平成27年３月　第34回(平成26年度)国立劇場文楽賞文楽大賞
平成29年11月　平成29年度兵庫県文化賞

認定の知らせを受けた時は、正直喜びより、驚きと戸惑いの方が大きかったですね。

「仮名手本忠臣蔵」　戸無瀬

「人間国宝の認定は、劇場へ足を運んでくださったお客様に50年間観て頂いた評価だと思いますので、とてもありがたいことと大変感謝しております。認定の知らせを受けた時は、正直喜びより、驚きと戸惑いの方が大きかったですね。まず頭に思い浮かべたのは、はたして私が歴代の人間国宝のかたのレベルに達しているのか？一昨年に亡くなった師匠（吉田文雀）はきっと高い所から『おまえ、それで大丈夫か』と言われていると思います。この戸惑いは当分続きそうです。」と控えめな笑顔で話される吉田和生さんは、昨年、人形浄瑠璃文楽の人形遣いとして重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。

― 文楽の世界に飛び込んだきっかけは

「よく聞かれる質問ですが、これを聞かれるのが一番つらい。いつも冗談で、間違ってなったと答えています」（笑い）。もともと文楽の世界に憧れて入った訳ではない。１人でコツコツやる職人のような仕事を探していた時に、文楽人形のかしらを作っていた人形師の大江巳之助さんの作業場を見学。人手は足りていると断られるが、後日師匠（吉田文雀）から「４月の文楽公演を見に来ないか」と誘いの手紙が来る。面白そうだと思い文楽を見学しに大阪へ、その日は師匠の家に泊めてもらい、翌日に「ほんで、どないする？」と師匠に問われ「やります」の一言でそのまま入門。師匠の家が西宮市にあったため、その付近で家を探し芦屋市に住む。「私が芦屋にきた当時は、まだ香櫨園の浜から芦屋の浜まで一直線に続いていました。よく師匠の子どもを連れて、網とバケツを持って魚捕りに行きましたよ。」

―芦屋市内のお気に入りのスポットは

「絵画を見に芦屋市立美術博物館や谷崎潤一郎記念館へ行きましたよ。もう少し若い頃は芦屋市立図書館もよく利用しましたので、文化ゾーンには馴染みがあります。また、芦屋市制施行50周年の記念事業で防潮堤に絵を描くイベント（あしやウォール ペインティング）があり家族で参加しました。その時描いた絵が賞をいただきました。残念ながら道路の工事で今は無くなってしまいましたが・・・。あと子どもが小さい頃は、まだ打出公園にお猿がいましたから、よく見にいきましたね。」

当時和生さんファミリーが防潮堤に描いた絵
【タイトル】「花と妖精」　佳作入賞

文楽は語り手の太夫と三味線弾きが織りなす音楽である義太夫節を人形遣いが視覚で表現する。俳優による会話劇ではない、独特の伝統芸能。

―その文楽の魅力とは

「世間一般には難しく考えられがちですが、単純にいえば芝居。表現が人間か人形であるかの違いです。ですが演目によって分かりやすい話もあれば、分かりにくい話もあります。太夫の節が独特で馴染みがないのと、昔の言葉なので難しく感じるところもあると思います。ですから１回目の鑑賞

■広報番組「あしやトライあんぐる」新春特集として、吉田和生さんと山中市長の対談を１月１日から放送します。ぜひ、広報番組もご覧ください。